今月の読み物

巨樹・巨木シリーズ-18　山梨県の巨樹・巨木

細田木材工業株式会社
顧 問　　細 田 安 治

山梨県は日本列島の中心部、東京の南西部に位置し、隣接県は東は神奈川、西は長野、南は静岡、北は埼玉に囲まれ、海を持たない。県庁所在地は甲府である。

〈山梨県の力〉

山梨県の概要を以下の表にまとめた。順位は47都道府県でのものである。

面積km2	總人口	人口密度	GDP総額	GDP一人当り
4465.27 38位	795554 41位	178.16 31位	3143411 32位	3528 24位

〈富士山〉

山梨県と静岡県にまたがっているが、山頂はどちらの県にも属さない私有地だ。八合目から頂上までの地主は、静岡県富士宮市所在の「富士山本宮浅間大社」の所有である。しかも神社の住所表記は静岡県富士市となっている。1897年（明治30年）に当時の宮内省御料局が境界調査を実施したが、山梨県と静岡県が異議を唱えその後、両県はそれぞれ独自に測量を行ったが、境界画定には至らなかった。

2014年（平成26年）に富士山が世界文化遺産に登録された際にも、県境問題が持ち挙がったが、静岡県と山梨県で「県境を定めない」ことで一致した。このように富士山の北側は、山梨県富士吉田市・富士河口湖町・鳴沢村であり、南側は静岡県富士宮市・富士市・裾野市・御殿場市・小山町にまたがっている。

富士山頂の土地の所属問題については1974年（昭和49）の最高裁判決で、その所有権が富士山本宮浅間大社にあると確定している（インターネット資料より）。

〈山梨県の巨樹・巨木の特徴〉

探索者のＵ氏は山梨県の巨樹探訪に３日間で70本の目標を立てたが、道路事情などもあり、１日目27本、２日目14本、３日目７本、合計48本を探査した。探索者Ｕ氏は思い込んだらわき目をふらずまっしぐらに進み、巨樹探索もしっかり本質を見抜き、理解し、自分流に正確に記録再現している。とてもまねのできない行動力に毎度のことながら感服している次第である。

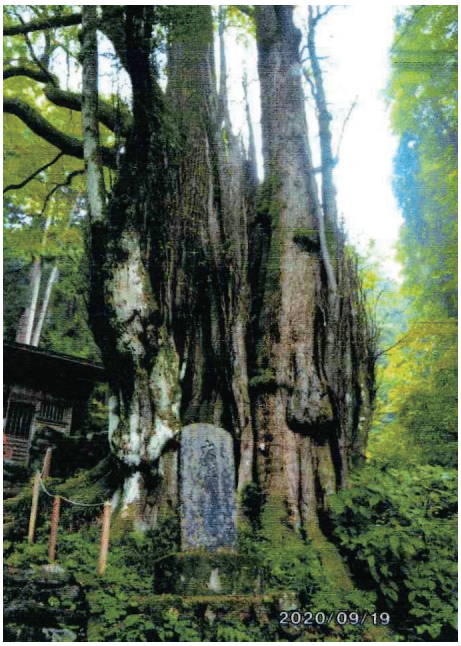
尚、今号では１日目の27本のうち筆者の独断と偏見で選んだ６本をご紹介する。

山梨の樹木の特徴として全体的に言えることは、探索の樹木が総じて真っすぐに育った素直な樹木は見当たらないということだ。樹種を問わずほとんどの樹木は根元から広がっている。つまり根バリしている。根バリも樹種によりそれぞれ違う。樹根が上がり、まるで「すだれ」のように見える樹木もあれば、石燈籠の基礎のように根がどっしり腰を下ろしており、獣の住み家のようなウロを持つものもある。ウ

ロの中には赤い涎掛けを付けたお地蔵様を内に持つ樹木もあれば、しめ縄と「御幣」で守られた祠を内に持つ樹木もあり様々だ。

山梨県の巨樹の多い地域は、地面が溶岩に覆われている地域である。1200年前の富士山の大噴火によって溶岩が流れ出し溶岩原ができ、風によって土が運ばれ草が生え、草原ができて次に樹木が生えてくる。つまり、噴火からの過程は噴火⇒溶岩流⇒溶岩原⇒草原⇒最後に箱根や阿蘇の外輪山、伊豆にもある大室山、小室山などお饅頭のような山ができるというものである。

筆者はハワイ島で、溶岩原と外輪山が連なっているのを見た。日本の外輪山は芝草が密生しゴルフ場の感覚だが、ハワイでも同じかと思いきや溶岩はゴロゴロ、草の下は溶岩原そのものでゴルフどころか歩行も困難な草原である。ハワイ島では溶岩原の一部を工事して飛行場に使っていた。



①軍刀利神社のカツラ

軍刀利神社のカツラ

写真番号１

樹齢500年推定　樹周10.2m　樹高33m　北都留郡上野原町桐原　県指定天然記念物

山梨県内最大のカツラである。正面に大きく成長した幹が２本あり、両脇を数知れぬほどのたくさんの幹が取り囲み勢いよく伸びている。この木の根元からは、清らかな水がわいているため「水の木」の別名がある。

この巨大なカツラの樹は、すだれ状の小枝で周囲を守り、一塊となり自然に挑戦し、闘い、天に向かって勢いよく伸びている。フランケンシュタイン顔の衛兵が守る足元には、石塔が樹の由来を刻んでひっそりと立つ、少年がコブ上に立つかに見える樹木全体は、二本煙突が立つ山小屋か。このような視点で見ると樹木は奥深く楽しめるものだ。

②鶴島のムクノキ

鶴島のムクノキ

写真番号２

樹齢700年推定　樹周6.3m　樹高23.4m　上野原市鶴島　県指定天然記念物

県内最大のムクノキでムクエノキとも呼ばれている。住宅地の道路脇にあり、道路拡張時に根元を削られたため、一部樹勢に衰えがみられる。また落雷による大きなウロもある。かつては、10月頃になると黒い実を近所の子供たちが来て食べていたという（教育委員会案内板より）

浜沢の大ケヤキ

写真番号３

樹齢300年以上　樹周8.84m　樹高19m　上野原市秋山浜沢　上野原市指定天然記念物

浜沢薬師堂の前庭にあり、北側は急斜面のため根の部分がまるで地図のように広がり、斜面の下まで伸びている。山崖（やまがけ）の洞窟を思わすケヤキの根元には大きなウロがあり、２本の木のように大きく二股に別れている。このウロと「コブコブ」した上は枝が四方に分かれ緑の葉をつけ、樹勢は旺盛である。

筆者はこの巨樹から大相撲の横綱土俵入りを見た。横綱が腰を下ろし力強く両手をあげた美しく力強いさま、木のコブコブは漲る（みなぎる）逞しい筋肉とした。このように想像することは執筆の大きな楽しみである。

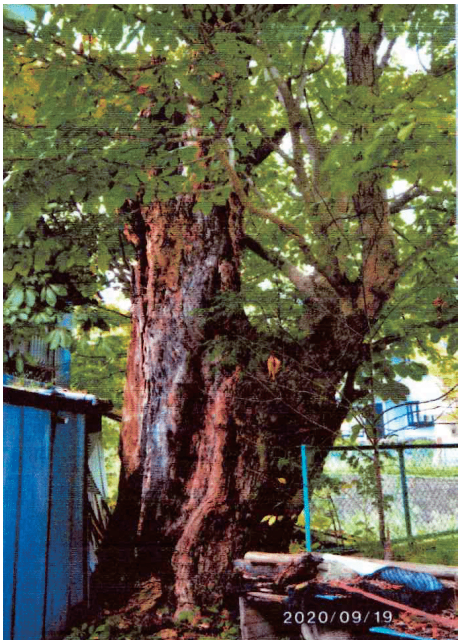
③浜沢の大ケヤキ

川久保のトチノキ

写真番号４　樹齢300年以上　樹周6.5m　　樹高15m　北都留郡小菅村川久保

川久保は県道18号（上野原丹波山線）と508号（大菩薩峠線）が交差するところだ。トチノキは集落のはずれの個人宅に立つ私有物だ。由来は不明なるも庭に立つ木としては大きな木だ。しかし残念ながら、だいぶ傷んできており全盛時の樹勢はみられない。上の部分は切られて、大きな空洞ができ、板で覆われている。しかし青々と伸びている枝を見るとまだまだ元気に見える。

またこの辺りは歴史の由来があるところとして知られ、室町時代初期に藤原安臣によって築かれた天神山小菅城がある。安土桃山時代の末裔藤原伸景は武田家の家臣として仕えたのち家康に仕えた。信景時代の勇猛７騎と言われた子孫が川久保付近に帰属し現在も住んでいる（ウィキペディア参考）。



④川久保のトチノキ

杣口（そまくち）サワラ林

写真番号５

樹齢300年　山梨市牧丘町杣口 杣口山　山梨県学術参考林　やまなしの森林100選

サワラの林は、笛吹川沿いの国道から県道219号線沿いの山中、標高1150mから1400mの沢の流れる谷沿いにある。木場公園の半分ぐらいの広さ（10ヘクタール）の安山岩質の上にサワラが群生している幻想的な林である。「サワラは本来湿潤な場所を好むといわれているが、この地では岩がごろごろする急峻地にも自生するサワラの特質をよくあらわした天然林として保存する」山梨県林務部より。

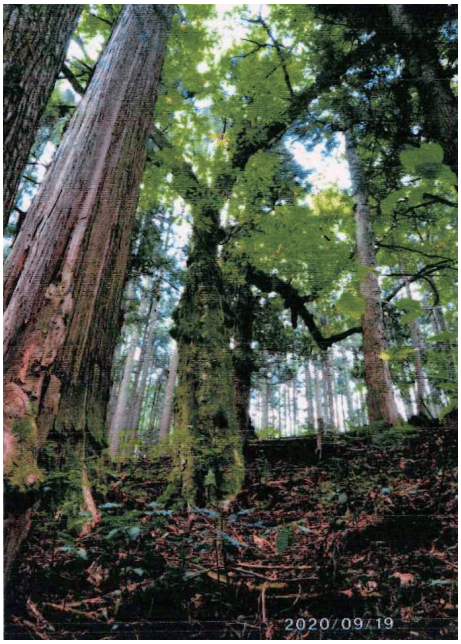
姥（うば）のトチ

写真番号６

樹齢200～300年　樹周7.7m　樹高29m　山梨市牧丘杣口 杣口山

景観の素晴らしい杣口山のサワラ林を抜け、奥地に入った沢沿いにある、びっくりするほどの大きなトチの木である。幹の中央に古代の猿人を思わす顔が見る人をにらみ、盛り上がったコブが幹の上部に連なるように並び、人を寄せ付けない威圧感を与え、近寄りがたい恐怖感すら覚える迫力ある巨樹である。

この地には、姥のトチのほかにも大きなトチが何本もある。この杣口山はサワラの群生ばかりか、トチの群生も見られる実に魅力的な山だ。



⑤杣口のサワラ林

筆者のつぶやき

育つ地もない溶岩原　根も張れず　支えるものなき　岩だらけ、風にあおられ、雨に叩かれ　枝は折られ　痛められ　傷つけられ　倒されても　身をよじり　地を這い　形が変わり　コブが付き、ウロができても、鎧をつけて、負けるものか、負けるものかと、天に向かって立ち上がった強い樹々だ。大自然の猛威とのすさまじい戦い、全身で受け入れ、受け止め、自らの体内に大自然との闘いを刻みこんだ樹木、我は地を這い、彼は天を突く、今は自然を取り込み仲良く生きている。人間を越えた樹木のすさまじい生きざまを見た思いだ。

⑥姥のトチ

毎日のように見ている公園の樹木、街路樹などは、人間に育てられ管理され長生きしている。街道筋に道しるべとして立つ樹木は、雷打ちで裂けたり折れたりしているものもある。これらは人間に助けられて息をしている樹木だが、山梨の厳しい溶岩地域に生息している樹木は人に助けられず自らの力で生きている。しかもすさまじく厳しい自然と共生しているこの姿に、強烈な衝撃を受けた。実物は見ていない。あくまでも、巨樹探索者Ｕ氏の探索記からの想像で書いている。しかし、書き進めるうちに、自分が見ているのと同じような感動を覚えた。青木ヶ原で実物と対面したら、感動のあまり倒れてしまうかもしれない。

青木ヶ原にはなんども行ったが、なかへは怖くて入れず遠くの展望台からこわごわ見る程度だった。この稿を書き進めているような問題意識はなく、ただ漫然と眺め、「迷い込んだら出られるのか。とても怖くて入れない」で終わっている。人間、問題意識があれば、視点が違う。何事も問題意識を持たねばならぬ、と思う昨今である。　続く